

平・上平地域の念仏道場の今と昔

著者	箱根 佑香
雑誌名	金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書
巻	36
ページ	36-45
発行年	2021-03-31
URL	http://doi.org/10.24517/00064083



4. 平・上平地域の念仏道場の今と昔

箱根 佑香

- | | |
|-------------|--------------|
| 1. はじめに | 5. 念仏道場における講 |
| 2. 念仏道場の概要 | 6. まとめと考察 |
| 3. 念仏道場の「昔」 | 7. おわりに |
| 4. 念仏道場の「今」 | |

1. はじめに

五箇山は、その発展とともに真宗が流入し、現在も真宗の信仰が根強く残っている。その信仰の歴史の中で、五箇山の「宗教」は「念仏道場」と強い繋がりがある。真宗を五箇山に定着させたとされる赤尾の道宗という人物は、精力的な布教活動を行うために道場（のち行徳寺）を設け、そこを拠点としたとされている。また加賀藩政の時代には、藩によって各集落に「念仏道場」が設置され、人々の信仰の拠り所となっていた。

今回はこの五箇山の中でも、平・上平地域の「念仏道場」に着目し、過去の念仏道場はどのような存在で、現在はどのような用途で使用されているのか、また念仏道場で実施される主な宗教行事「講」についても触れ、「念仏道場」という存在の今と昔について考察を行いたいと思う。

その結果明らかになるのは、かつて念仏道場が、宗教的な役割とともにもっていた、地域の人々が集う場としての社会的な役割であり、時代の変化とともに、それらの役割に変化が生じているということである。

2. 念仏道場の概要

ここからは、念仏道場について「五箇山の念仏道場と仏教行事の変化に関する研究ー利賀地区を中心としてー」（瀧澤 2014）を基に述べる。そもそも念仏道場とは、浄土真宗における寺院の初期形態である。道場は15世紀以降全国に数多く開かれ、それらの道場の多くは江戸時代中期以降寺号を取得し、寺院となっていく。また、念仏道場には、念仏道場の管理などを行う念仏道場役（道場主）が必ず存在している。五箇山の道場は、五箇山に真教集団が現れ、真宗の寺々が成立した室町期大永（1521～1528年）の時代に建設されるようになった。その後寺号を獲得した念仏道場（行徳寺、道善寺など）もあったが、五箇山の念仏道場は、寺号を取得した後も、実際の運営のされ方は寺号取得以前と変わらず、道場としての形態を残している場合が多い。

2.1 五箇山の念仏道場一覧

以下は、南砺市ブランド戦略部文化・世界遺産課文化振興係が運営するウェブサイト

「南砺市文化芸術アーカイブズ」と、論文「五箇山の念仏道場と仏教行事の変化に関する研究―利賀地区を中心として―」（瀧澤 2014）を基に、上平と平地域の念仏道場について述べる。

(a)上平の念仏道場

上平の 19 の集落のうち、5 割ほどの集落に寺か道場が存在している。その中でも西赤尾集落には「行徳寺」という 16 世紀初め頃に設置された寺院がある。先述した通り行徳寺は、五箇山に真宗を定着させた人物である道宗が、五箇山への真宗布教のための拠点として建立した「赤尾道場」が寺号を取得したものである（「世界遺産五箇山観光情報サイト 五箇山彩歳 [歴史と文化／文化]」）。また、上平には他にも、道善寺という同時期に道宗が建立した寺が新屋に存在する。道場を持つのは、菅沼を除き昔からある程度の人口を保持していた集落であり、その中でも民家が集まっていた場所に建てられている。各道場の創立時期は室町後期から江戸後期まで、建築年代は再建などの関係から文化 5（1808）年から昭和 43（1968）年までと幅広い。

<念仏道場の例>

猪谷道場①・②、細島道場、旧上中田道場、小原道場、漆谷道場、下島道場、など。

(b)平の念仏道場

平の 25 の集落のうち、今も人が住む 21 の集落すべてに道場が存在しており、道場の多くは、上平同様民家群の中に建てられている。各道場の創立時期は、室町後期から明治 40（1907）年まで多岐に渡っている。最新の明治期に創立したものは複数の集落の共有道場から独立したものである。道場の建築年代の多くは江戸後期～昭和 40（1965）年代である。

<念仏道場の例>

- ・真宗大谷派：祖山道場、杉尾道場、高草嶺道場、夏焼内道場、梨谷道場、小来栖道場、来栖道場、九厘道場、渡原道場
- ・本願寺派：大崩島道場、入谷道場、寿川道場、東中江道場、下出道場、籠渡道場、西方道場



写真 1 平地区にある西方念仏道場の外観。民宿の近くに位置している（2020 年 11 月 28 日、筆者撮影）。

3. 念仏道場の「昔」

本節では、文献および聞き取り調査を基に、平・上平を中心とした、昔の念仏道場の姿（役割、存在意義など）について述べる。

3.1 昔の念仏道場（文献からの情報）

村松（1955：2-4）は、五箇山の念仏道場について以下のように書いている。

「五箇山は真宗の信仰が根強く、ムラ全体で一つの信仰集団を形成している。ムラの中心には、村民共有の念仏道場があり、寄り合い場所として地域社会の生活の核心となっている。また、祭りの際の踊りなどは道場の境内の中で行い、雨が降れば道場の中で開催する（下梨以外）」

また富山県教育員会が発刊した「越中五箇三村の民俗：越中五箇山民俗資料緊急調査報告書」（1971：101-102、105-111）には、以下のような記載がある。

「室町期大永の時代、五箇山に真教集団が現れ、真宗の寺々が成立した際に出現した。この五箇山の念仏道場は、真宗寺院の原初形態というよりも、部落の公共建築物として生活の中心となっている。道場は、寄り合いの場となるほか、講や総儀（部落の総報恩講）などの仏事の開催場所ともなっている。さらに、葬具や獅子舞道具など部落の共用道具の保管、講に使用される共同什器の保管、の場所としても使用されている。そして、念仏道場を管理する念仏道場役は、区長と同様に部落代表的な性格を持っている。また、念仏道場の実際の例としては以下の内容が挙げられる。大崩島（平）には大谷派・本願寺派統一の道場があり、道場では1年を通して特別行事がないが、人々は、正月とお盆にはお詣りに行く。寿川（平）の道場も、大崩島と同じく道場での年中行事はなく、正月とお盆のお詣りのみである。入谷（平）の道場では、毎月十六日様のお詣りを行い、村人で集まって会食をして楽しむ」

3.2 昔の念仏道場（聞き取り調査からの情報）

Hさんご夫婦（40歳代、新屋）

「本寺」が「本部」だとしたら、「念仏道場」は「支店」のようなものであった。かつては主に話し合いの場所として利用されていた。また、念仏道場の宗教的な役割としては、「各地域の門徒をまとめ、地域の隅々まで教化を行い、地域住民らへ『本寺の門徒』という意識づけを強化すること」であった。過去の念仏道場の存在意義としては、心の拠り所、本寺の住職と地域とのつながりの強化、地域の結束力の向上などがあったように感じる。道場主は区長さんなど地域のリーダー的存在が務める、「宿主」的存在であった。また、昔は本寺の住職を呼んで道場で葬儀を行っており、これも本寺の住職を呼ぶことによる、本寺の門徒の意識づけの方法の一つでもあったと思う。

Hさん（男性、65歳、相倉）

念仏道場は、集会所的存在で、身近にある遊び場であり娯楽施設の対象でもあった。自身が子供の頃は、念仏道場の扉の裏に落書きして遊んだり、鬼ごっこやかくれんぼをして遊んだりもしていた。自分の子ども（昭和57〔1982〕年生まれ）が

小学生の頃は、皆で集まって勉強していた時もあった。昔はお年寄りが頻繁に道場へお参りしていたが、それは世間体もあってしていたところもあるのではないかと思う。お参りの後は、コミュニケーションの場にもなっており、囲炉裏を囲んでみんなで話していた。昔は、晩秋の報恩講のシーズンになると、道場や家々の報恩講のために、福井県の万法寺（本寺）の住職がおいでになり、人々が大勢集まった。道場で住職が説教をする際は、人が多すぎて



写真 2 平地区にある西方念仏道場の扉の裏側の落書き。ここからも、子どもたちの遊び場であったことが見て取れる（2020年11月28日、筆者撮影）。

後ろの方は住職が見えにくいため、住職は高座に乗ってお説教していた（現在は親戚のみの講）。また、その万法寺の住職は、相倉の門徒家には1軒1軒お参りしていなかったが、相倉から出た県内外の門徒の人の家へは直接お参りしていた。京都の本山から若い住職が来たこともあった。

Mさん（男性、75歳、細島）

念仏道場は、お寺の前身であり、各集落に存在していた。道守（念仏道場役）が寺号を獲得することで寺になるが、獲得しなかったのが念仏道場として残った。昔はお寺や念仏道場で葬式を実施していたが、現在は両者とも市街の式場や斎場で行うようになった。地域によっては、西に寺・東に念仏道場が位置しているところもある。念仏道場は、ある程度の広さがあるため、地域の人が一気に集まりやすく、地域の集会場の存在になったのではないかと思う。また、神社には、地域の人々が一堂に会することの出来る社務所などが無いため、祭礼の際には、念仏道場を利用して集会や踊りなどを行ったのではないかと思う。

以上の文献調査および聞き取り調査の情報より、平および上平地域の念仏道場は本来の意味である「真宗寺院の前身」として、というよりも「地域の人々の共同施設」として、地域の中で中心的役割を果たしていたといえる。また、具体的な念仏道場の用途としては、①「寄り合い」などの話し合いの場、②報恩講や祀堂経といった仏事の場、③葬儀場、④地域の共用道具（祭りや葬儀で使われる）の保管場所、⑤遊び（祭りの際の踊り）やコミュニケーションの場、といったものがあったことが分かった。そして念仏道場は、仏事といった特別な場合のみならず、遊びや勉強をする際にも使用されており、地域の人々の生活にとって非常に身近な存在であったことが言える。しかし本寺の真宗寺院の「支店」や「部下」として、隅々までの地域の教化を行い、門徒らに「本寺の門徒である」という意識を植え付ける役割も果たしていたことが分かった。なぜ念仏道場

が仏事以外でも一同が会する際に使用されていたかということについては、念仏道場が地域の中でもある程度の広さを持つ場所であったことが、理由として挙げられていた。

4. 念仏道場の「今」

本節では、地元の方々の聞き取りを基に、平・上平を中心とした、今の念仏道場の姿（役割、存在意義など）について述べる。

4.1 現在の念仏道場

Hさんご夫婦（40 歳代、新屋）

現在も、本寺の住職が地域に宿泊する際に、念仏道場を「宿」として使用する。しかし今は、村民の中の地元への帰属意識が希薄化し、個々のつながりが優先されるようになったため、昔のような「地域共有の施設」という念仏道場の意義は薄れたように感じる。また、念仏道場は寺に比べ、存続させていこうという意識が薄いように感じる。これに関しては、何か仏事をする際にも「本寺」の許可が必要であり、さらには細原、小原、小瀬の念仏道場は鯖江の万法寺の手次寺のような存在であるため、報恩講などはすべて「万法寺主宰」となるがゆえに、主体的に何か念仏道場で行うという意識が少ないことが原因となっているように感じる。そして、上平では念仏道場と住居が離れていることが多いため、念仏道場役の高齢化なども相まって管理やお給仕が大変になっている。

Hさん（女性、65 歳、相倉）

現在は、念仏道場にお参りする人は、道場報恩講の時以外はほとんどない。日常に念仏を唱える人は高齢者がひと握りといっても過言ではない。自身の若い頃には、周りのお年寄りが、南無阿弥陀仏と一日に幾度となく唱えるのを聞いていたもので、それだけ昔は念仏と生活が密着していたと感じる。現在の相倉は、真宗大谷派の門徒ばかりで、本願寺派の門徒が自分たち家族以外に 1 人もいない。今の自分の認識としては、自分のお寺に参るのがやっとで、自分の生活を維持することで忙しく、お寺さんが来られる時や、16 日サマの時は念仏道場の仏壇にお供えをするが、それ以外はお供えなどもしていない。

Hさん（男性、65 歳、相倉）

今は相倉自体に民家が 14 軒しか存在せず（昭和 30 [1955] 年代は 42、3 軒）、過疎化によって高齢者すら少ない状況であり、お西の門徒さん（本願寺派の門徒）がいらっしゃらない。正直念仏道場は、信仰の場所としての役割を果たしていないように感じる。ただ、念仏道場を開いていない（利用していない）わけではなく、報恩講時などは今も親戚や集落の人を呼んで行っている。寺号の取得に関しては、



写真 3 平地区にある西方念仏道場の内部。ある程度の広さがあり、奥には仏壇がある（2020 年 11 月 28 日、筆者撮影）。

相念寺や見覚寺などお東の念仏道場は寺号を持ったが、西方道場（お西）は万法寺の「下」という認識があり、寺号を持たなかった。また、西方道場の仏壇の大仏は、1700 年頃くらいに相念寺から来たものと思われる。近隣の念仏道場の関わりとしては、6 名の近隣集落（上梨、相念寺、見座、中畑）の住職が、父の葬式のお勤めに来ており、さらにお葬式は万法寺を中心に執り行っていた。相倉、見座、中畑地区同士では昔から交流があった。平村にある県指定文化財の寿川道場は、現在は管理がメインで、実際に活用されておらず、利用頻度は少ない。また、相倉にお西の西方道場と、お東の相念寺の両方が位置している理由としては、相倉が他の集落（上梨の圓浄寺や中畑の本教寺）からの門徒さんが移住した集落であったことが、理由として挙げられると思う。

以上の聞き取りの内容から、念仏道場が利用されるのは報恩講などの仏事の際のみで、以前のような念仏道場の姿はほとんど維持されていないということが分かった。さらに、唯一利用される機会である、その仏事の回数自体も減少していることが分かった。また、以前の姿が見られなくなった理由としては、①人口減少による過疎化で、門徒の人口自体が減少したこと、②村民の帰属意識の希薄化によって地域全体の繋がりが弱まり、一同が会する機会自体が少なくなったこと、③念仏道場自体が存続していこうという意識が薄いこと、④念仏道場と管理者の家とが離れているため、管理の維持が難しいこと、⑤自身の生活の維持が忙しく、念仏道場を利用する機会が減少したこと、などが挙げられていた。

5. 念仏道場における講

本節では、今まで見てきた念仏道場における主要な仏事である「講（お寺から住職を招いて説法を聞き、その後列席者一同で会食をするという仏事のこと）」に着目し、その実施状況や内容についての今昔比較を行う。

5.1 昔の講について

ここからは、文献調査での情報と、聞き取り調査の情報を基に、どのような講があったのか、そして念仏道場においてはどの程度、あるいはどのように行われていたのかについて、まとめる。

(a)文献調査

富山県教育委員会が発行した「越中五箇三村の民俗：越中五箇山民俗資料緊急調査報告書」（1971：111-114）では、以下のような内容が述べられている。

<講の種類>

- ・相続講：十日講（念仏を唱えて住職の説法を聞く場）の代わりに実施される。各部落の道場で、前法主の命日に説教を聞き、当番制で食事（オトキ）を出す。しかし、太平洋戦争後は、食料配給制によって行事が減少し、説教を聞くのみになった。

・報恩講：

- ① 寺や道場の報恩講：お盆過ぎから 9 月の収穫期の期間に、2～3 日間、夕方からお昼にかけて行う。僧侶達の勤めと説教の後、食事が出るが、この食事は村人全員が楽しみにしていた。
- ② 在家の報恩講：雪の関係で、9 月～12 月の間は村々で報恩講勤めを行う。手次寺の僧侶が来た際には、番僧や道場守が家々を一緒に回る。これが終わると、道場は 1、2 月に地元の村の報恩講を回った。
- ・ 28 日講：11 月 28 日が親鸞の命日のため、毎月 28 日にどの寺でも実施されていた。しかし、支那事変頃（1937～1945 年）から行われなくなった。これに対するように 6 日講という講もあったが、現在は単にお講と呼ばれ、次第に薄らいでいる。
- ・ 若衆講：秋仕事の後、道場ごとに「惣儀」と呼ばれる、若い衆による報恩講が行われた。皆で集まって食事をして説教を聞くのが基本だが、時には法要も行った。
- ・ 尼講：女性による講。細島で行われていたが、若衆講と合流した。
- ・ 興仁講：大正 8～9（1919～1920）年頃に皆葎で行われていた。時には供養法事も行われていたが、現存していない。
- ・ 百人講：明治の初め頃から、平村の村長が主導となって、7 つの部落合同で 4 月初めとお盆の頃の年 2 回行われている。
- ・ 本山講：秋の収穫終了後、京都の本山から菩提不布教がきている。

また、宇治（2012：34-35）は、報恩講について以下のような内容を述べている。

「報恩講参拝者の親族構成は、元世帯主と同世代者が多く、夫婦同伴者も多い。また、集団で行われていた報恩講は、相互の連携を密にするためにも行われていた。平村のような物質的基盤による耕作地の狭い場所では、諸行事を十分にこなすことができないが、家系を重視する精神が、おのずと親族間の相互義務として機能されていった。報恩講は後継者と親族関係者に対する義理的慣行である。そして講全体が、親族組織の系譜的脈絡にもとづく同族組織と平行して機能している」

(b)聞き取り調査

Hさんご夫婦（40 歳代、新屋）

講では法要の後、「オトキ」と呼ばれる親戚一同で食べる食事があったが、この食事の際の食料は親戚みんなで持ち寄って調理していた。また、祖父母が子供の頃は、ごちそう（かのこなど）が出るため報恩講が楽しみだった。この講は、単なる法要の場となるのみならず交流の場でもあり、故人を偲ぶ場でもあった。また、1 年会えなくても親戚や集落の人々とは報恩講があれば会うため、安否確認の場でもあった。

以上の内容から、1970 年頃の平・上平地域の念仏道場では 7 つほどの講が実施され

ていたことが分かった。また、住職の説法を聞いたのちに、列席者一同で食事をするという目的だけでなく、交流や安否確認といった目的もあったことが分かった。さらに、講の際の「オトキ」はかなりのごちそうで、列席者全員が楽しみにしていた。文献では、上平や平のような耕作地の少ない場所では、諸行事が十分に出来ない代わりに、家系を重視する精神が親戚間で義務のように存在していた、という指摘があったが、講のような親戚一同で行う行事はその精神に即していたため、平や上平では講が活発に行われていたのではないかと考えられる。

5.2 今の講

ここからは、聞き取り調査での情報をもとに、現在「講」はどの程度、そしてどのように行われているかについて、述べる。

Hさんご夫婦（40歳代、新屋）

現在、念仏道場で講を実施することはあまり無い。新屋にある道善寺では、春秋季祠堂経会が開かれ、春と秋に6日間、朝昼夜説教の場を設けているが、高齢者の夜道に対する「怖さ」や交通量増加による事故の増加、などから夜の部の実施回数は減少している。また、その他の様々な講は、興仁講は皆蓮寺（皆律）で実施、百人講は瑞願寺（下梨）で実施（平村の高岡さんが率先して実施している）、太子講は聖光寺（楮）で実施、している。万人講（百人講のもっと規模の大きい講）は以前流行っていたが、明治初期には無くなっていた。お七夜は細島などで実施していたが、最近無くなっている。「オトキ」は、高齢化・漆器など器の手入れの難しさ・農協が作る仕出しの廃止、などから現在は実施する家庭が減少し、多くの家庭で食事は豪勢でなくなった。また、現在はオトキの分をお金で渡し、報恩講を短縮する場合もある。若い世代は報恩講をやらない。講は本来双方向のやり取りであり、円座でひざを突き合わせて行うのが理想であるが、明治から、住職のみが話す一方通行の学校スタイルになってしまい、本来の姿が失われつつある。以前は寒い中お寺で報恩講を実施し、ヒートショックで亡くなった高齢者もいた。

Hさん（女性、65歳、相倉）

毎年、秋の終わりに念仏道場と家の報恩講があり、報恩講の数日前には家と道場様の輪燈磨きをする。通常手次寺の福井の万法寺から住職が来られて報恩講が始まり、住職には家に泊まってもらう。今年も道場には在所の数人（日にちと時間が合わせられる限られた人）がお参りに来たが、今年はコロナ禍の中での報恩講だったため、住職は家の報恩講を済ませ日帰りされた。

Hさん（男性、65歳、相倉）

祀堂経と呼ばれる講に類似した仏事（お七夜）を、16日にのみ親鸞の遺徳を偲んで行う。16日サマ（講の一種）はお西のみ1月16日に実施し、この16日サマと、父母・義父母の月命日のみ自身でお参りしている。家々の報恩講は、秋終い（冬に向けた準備）の後、お寺さんと日程を相談の上、実施している。今年は11月17

日に、家と道場で2日間、秋の報恩講を実施し、2泊3日で万法寺のお坊さんがいらっしゃった。在所の一般の方4人、家族4人で実施し、13:30~14:30でお勤めと説教、16:00~17:30で家の報恩講を行った。今年はコロナのためオトキをしなかった。自身の家の報恩講の流れとしては、オトキ→お勤め→説教→2番御前(10時からの夜食)である。昔の2番御前では、住職も含め夜が明けるまでお酒を飲む。また、子どもたち(自分も自分の息子も)も夜食を楽しみにしていた。父の時代くらいからは、1時間前後でお開きとしている。

Mさん(男性、75歳、細島)

現在も多くの家庭で10月~年末にかけて盛んに実施されており、親戚で集ってお坊さんに読経をあげてもらう。しかし、説法まですることは少なくなった。以前はオトキで手料理を出していたが、仕出し(農協が担当)をとるようになった。しかし、今年に入ってから担当しなくなったため、住民は非常に困っている。

Iさん(男性、88歳、西赤尾)

隣接する行徳寺で報恩講や葬式を執り行ってきた。西赤尾周辺にて報恩講を行う際は、大体行徳寺の僧に執り行ってもらう。報恩講は農作物を収穫し終わった11月あたりから行う。

以上のように、現在でもいくつかの家庭では、家々や寺で報恩講が実施されているが、道場単位で行う報恩講は非常に少ないことが分かった。そして、「5.1 昔の講について」で記述したさまざまな講は、お寺主宰では行っているものの、1970年頃のように念仏道場で行われていることはほぼないことも分かった。そもそも若い世代はもう講をやらない、といった指摘もあった。また、実施されたとしても、説法を行わないなど内容を短縮する場合も多く、さらに、講の際の楽しみでもあったオトキは、①高齢化による調理の人手不足、②食器の管理の難しさ、③農協によるオトキの仕出しの廃止、などから以前のように豪勢では無くなり、作ること自体も難しくなっていることが分かった。

6. まとめと考察

今まで述べてきたように、平と上平地域の念仏道場は室町時代大永期に、五箇山への真宗流入と共に設立され、「真宗寺院の前身」として、寺院と道場との繋がりを強め、地域住民の隅々までの教化の役割を担っていた。しかし、それ以上に「地域の共有施設」として、寄り合いの場、共有道具の保管の場、遊び・勉強の場といった面で地域の中心的役割を担っており、住民の生活に身近な「心の拠り所」となっていた。しかし、現在は過疎化、住民の地域集団への帰属意識の薄れ、道場自体の存続への意識の薄さなど、さまざまな要因から、本来の役割や存在意義は薄れ、念仏道場は機能しなくなっている。また、念仏道場で行われる主要な仏事である「講」は、1970年代には7つもの講が平や上平の念仏道場で実施されており、単なる仏事という位置づけではなくコミュニケー

ションの場や安否確認の場としても認識されていた。また、講の際のオトキは非常に豪勢で、子供から大人までも楽しみにしていた。現在は、お寺や家々では実施されているところもあるが、念仏道場で講を行うという話はあまり聞くことが出来ず、珍しいことだと言える。また、講を実施したとしても、その内容が短縮されたり、オトキが手料理や豪勢でなくなったりと、内容を変更・縮小する場合が多い。

平や上平のような過疎地域は、住民同士のつながりや地域同士のつながりが重視される今だからこそ、念仏道場やそこで行われる講のような、全員が集まることの出来る場が必要であるように思うが、そもそもそのつながりを必要とする人々が少ないために、これらが機能していないという現状があるように思う。また、現在の念仏道場は「仏事を行う場合にのみ」使用されており、今までのような遊びや勉強といった身近なシーンで使用されることが無くなっているように感じる。だからこそ今後は、地域間の繋がりを作るようなイベントを念仏道場で実施したり、身近なシーンで利用してもらえるように念仏道場の敷居を低くして、今一度住民が利用できるように常に開放したりするなど、地域のつながりの強化と念仏道場をうまく掛け合わせて、念仏道場の本来の役割を取り戻す何かが出来ないのだろうかと感じた。また、調査をしていく中で、地域住民や念仏道場を管理する念仏道場役が、念仏道場を価値あるものとして残していきたいと考えているのか、といったそもそもの考えをもっと知る必要があると感じた。

7. おわりに

今回は、3泊4日の実習調査と追加調査のなかで、昔と今の念仏道場について調べましたが、主に観光サイトなどのウェブサイトに掲載されている情報と、実際に聞き取り調査で得た情報には、大きな違いがあることを強く感じ、実際に現地に行って自分の足で調べることの重要性を感じました。また、調査をしていく中で、一学生の研究のために沢山の協力をしてくれた平・上平地域の方々のやさしさに触れ、心が非常に温くなりました。特に、追加調査で訪れた住民の方々、また住民の方々を紹介して下さった方には感謝の気持ちでいっぱいです。最後に、このような大変な状況下でも、私たち大学生を受け入れ、調査・研究に力を貸して下さったすべての方々に心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。